

日本語学会第 149 回大会発表要旨

The 149th Meeting of the Linguistic Society of Japan
Abstracts of Oral presentations, Poster presentations, and Workshops

期 日：2014 年 11 月 15 日（土）・16 日（日）

会 場：愛媛大学城北キャンパス

〒790-8577 愛媛県松山市文京町 3

Dates: Saturday, November 15, Sunday 16, 2014

Venue: Ehime University, Johoku Campus

3, Bunkyo-cho, Matsuyama, Ehime Pref. 790-8577, Japan

第 1 日（11 月 15 日）

13:00－17:40 口頭発表（共通教育講義棟 3 階，4 階）

第 2 日（11 月 16 日）

10:00－12:00 ワークショップ（共通教育講義棟 2 階，3 階，4 階）

11:30－12:50 ポスター発表（共通教育講義棟 3 階）

13:20－16:20 公開シンポジウム（グリーンホール）

Day1

13:00 - 17:40 Oral presentations

(The 3th &4th floor of Lecture Hall for General Education)

Day2

10:00 - 12:00 Workshops

(The 2nd, 3th &4th floor of Lecture Hall for General Education)

11:30 - 12:50 Poster presentations

(The 3th floor of Lecture Hall for General Education)

13:20 - 16:20 Symposium (Green Hall)

■口頭発表 (11月15日(土) 13:00-17:40)

[A-1]

韓国語の語彙的複合動詞の意味解釈 —LCS の合成とその制約を中心に—

全 敏 杞

本発表では韓国語の複合動詞にも日本語と同様、語彙的・統語的複合動詞が存在することを影山(1993)のテストを援用した全(2013)を参照し、証明する。由本(1996, 2005)は単一事象構造を表す LCS は少数の者に限定され、語彙的複合動詞は V1 と V2 の LCS の適切な合成により成立すると主張する。この考えに従い、韓国語の語彙的複合動詞も LCS の適切な合成により、成立することを証明する。各合成パターンには意味的制約があり、全体の制約として「主語の同定」があげられ、これは日本語と共通している。一方、影山(2013)は従来「補文関係」と定義した語彙的複合動詞を見直した。この複合動詞の V2 が Lexical-Aspect(L-asp)を表し、意味、格関係を決めるのは V1 であるとしている。同じく V2 が L-asp を表すが、韓国語の語彙的複合動詞の場合、選択素性、アスペクト素性は V2 にあり、日本語と異なる点であることを主張する。

[A-2]

動名詞と存在文

久保田 一充

本発表は、現代日本語を対象に、主語として動名詞 (VN) が現れている存在文 (「出来事存在文 VN」) を取り上げる。VN の項具現, VN スル文 (受動文も含む) との関係に注目しながら、出来事存在文 VN の特徴を把握することが目的である。考察の前半は、出来事存在文 VN には、能動態 VN スル文と意味的に対応するもの、受動態 VN スル文と意味的に対応するもの、意味的に対応する VN スル文がないもの、の 3 種類が認められることを記述する。3 つ目の出来事存在文 VN があるのは (「月初に会社で異動があった」), この構文が、VN スル文にはない、全項の背景化という機能を果たすことができるからである。考察の後半では、前半で観察したものとは区別されるべき出来事存在文 VN の存在を指摘する (「昨日、公園の掃除があった」)。この種の構文を、非個人的活動の出来事存在文 VN と特徴づける。また、非個人的活動の出来事存在文 VN と単純事態名詞の出来事存在文との並行性も確認する。

[A-3]

日本語文産出の語順選好に及ぼす競合的要因の検証

鈴木 孝明

文産出において語順選好に影響を及ぼす「文法の重み」(grammatical weight)と「情報の重み」(information weight)という2つの独立した競合的要因を日本語において調査した。文法の重みとは、相対的な句の長さが語順に影響するという考え方である。また、情報の重みとは情報の顕著性や重要性が語順に影響するという考え方である。実験では、文法の重みを主語や目的語に使われる語句の長さによって制御し、情報の重みは事前に *wh* 疑問文を与えることで操作した。成人母語話者(N=21)を対象に単文の発話課題を行った結果、OSV 語順の産出率は、情報の重みによってのみ高くなることがわかった。よって、たとえ目的語に長い語句が使用される場合でも、文法の重み(長い句)によってかき混ぜ文が産出されるわけではなく、その長い句に含まれる情報の重要性が発話者の語順選好に影響を与えると考えられる。

[A-4]

名詞複合語連濁生起における、アクセント変化および同一モーラ連続の影響：

発話実験による検討

曾根 雅輝, 広瀬 友紀

本研究では名詞複合語の連濁生起に関わる要因として、1) 複合語アクセント規則適用の明示性、2) もとの語彙における同一モーラの繰り返しの有無、という二点を操作した架空複合語産出実験を行った。1) では後部要素のアクセントを二種類設定し(頭高 vs. 平板、いずれも複合語形成後は頭高と同じ位置にアクセント核が置かれる)、複合語形成の前後での後部要素上の表面的なアクセント変化の有無を操作した。2) では後部要素の語頭での同一モーラ連続の有無により(例 森+かから vs. 森+かすれ)、連濁の生起が後部要素内での同一モーラの連続を回避しうる状況の有無を操作した。この結果、I. 複合語生成前後で後部要素のアクセントが明示的に変化する場合に連濁の生起率がより高くなること(平板型 > 頭高型)、II. 後部要素内に同一無声子音を含むモーラの連続が存在する場合は連濁生起率が高くなり、連濁による異化が促進されることを示した。

[A-5]

Processing of pre-nominal relative clauses in Korean

KIM Yoan, Masataka Yano, Yuki Tateyama, Tsutomu Sakamoto

Researches on language-universal tend to center on common patterns of many languages or idealized linguistic competence. However, processing constraints can be one of the reasons behind universal conventions of language. As such, this study examined Korean relative clause(RC) sentences to find out universal and specific characteristics of Korean RCs from processing perspective using an event-related brain potential (ERP) experiment.

The result showed that the processing mechanism for activation and integration is universal and reflected as corresponding ERP components of LAN and integration P600. Both LAN and P600 were bigger for subject relative sentences comparing to object relative sentences. Based on the result, we argue that the activation and integration cost is determined by the linear distance between filler and gap.

[A-6]

日本語の第一言語獲得早期における動詞屈折とインプット

巽 智子, Julian M. Pine

第一言語獲得早期において、幼児が必要な屈折要素を欠いた動詞形を産出する現象は、Root Infinitive (RI) 等と呼ばれ、日本語を含む様々な言語で研究されてきた。本研究は、コーパスデータの記述分析によって、日本語の言語獲得において RI に相当する現象は無いことを示した上で、幼児の使う屈折形式の分布がインプットの統計的性質によって説明されうることを定量的分析をもって論じる。動詞使用の初期から幼児は様々な屈折形を用い、RI に相当し得るような動詞一般に見られる分布パターンは無く、むしろ、動詞ごとに屈折形の分布が異なる。続く定量的分析では、こうした幼児の言語使用における動詞個別的な屈折形の分布パターンとインプット言語における頻度等の要因との有意な相関が明らかになった。言語獲得早期における、インプット言語に基づいた習得プロセスの重要性を示す結果である。

[A-7]

日本語失文法者の間接受動文産出に関する一考察

井原 浩子, 藤田 郁代

ブローカ失語に代表される失文法症者は一般的に能動文に比べて受動文は理解、産出ともに難しいことが知られている。本発表では日本語失文法者の一症例に対する産出実験では、①直接受動文と間接受動文（迷惑受身文）の主語の産出に有意な難易差はなかったこと、②間接受動文のうち他動詞（例：花子が太郎にドアを開けられる）は非能格自動詞（例：太郎が花子に映画館で泣かれる）に比べて主語の産出の正答率が有意に低かったこと、を報告する。その上で、今回の結果は、ギャップの有無（直接受動文はギャップがあるが、間接受動文にはない）や統語構造上の主語の位置（間接受動文の主語の方が直接受動文の主語よりも上に位置する）と **Tree Pruning Hypothesis**（統語構造のある部分に障害が起きた場合、その位置よりも統語構造上、上の部分はすべて障害されるという仮説）の組合せでは説明しにくいことを示し、代わりに項構造と行為連鎖という観点から検討する。

[B-1]

内モンゴルのモンゴル語諸方言に見られる終助詞 =lee について

山田 洋平

モンゴル諸語東部のホルチン・モンゴル語をはじめとするモンゴル語諸方言には、「未来否定形式」などと呼ばれる =lee という文末表現がある。この形式は内モンゴル地域のモンゴル語話し言葉において広く、また高い頻度で用いられているが、従来この形式について十分な研究は行われてきていない。本研究では協力者からの聞き取り調査によって、次の2点を明らかにした。一、=lee は基本的に主文の述語の否定形式に後続する終助詞的要素である。二、=lee の意味の核は「変化」にあり、否定形式と結びついて「～なくなる／もう～ない／（やっぱり考えを改め）～ないことにする」といった意味を表す。そしてこれらのことから、周辺の大言語である漢語の *le* (*chi*. 了) と =lee との関連が伺える。一般に「完了」を表すとされる漢語の *le* だが、否定の *bù* などとともに用いられた場合「状況が変わり本来の計画や傾向に変更が生じた」ことを表すという。こうした意味や用法は =lee とよく似ている。

[B-2]

現代ウイグル語の接辞-*IK*について

新田 志穂

現代ウイグル語の接辞の-*IK* について、派生接辞であるとする記述が先行研究に典型的に見られるが、補文標識として扱っている記述もある。すなわち、-*IK* は様々な単位に付加されうるということになる。特にそのことに着目して、本発表では-*IK* に次の 2 点の特徴があることを指摘する：1) 現代ウイグル語の-*IK* は、語という形態論的単位に付くことができ、同時に、句・節といった統語的単位にも付加されうる点で、単なる派生接辞とは言えない。2) -*IK* が付加された語や句の統語的な機能は、単一の機能に限定されない場合がある。このことは、現代ウイグル語における単純語にも当てはまる。一方で、-*IK* が付加された節は、名詞的にのみ機能する。つまり、-*IK* が付加される要素が語・句である場合は、単純語と同じ振る舞いを示す傾向にあり、-*IK* が付加される要素が節である場合はそうではないと言える。

[B-3]

アルタ語における動詞接辞の分類と記述

木本 幸憲

本発表では、フィリピン・ルソン島で話されているオーストロネシア語族（マラヨ・ポリネシア語派 北部ルソン諸語）の言語、アルタ語（Arta）の動詞形態論を論じる。まず態の区別は、動作主が主格となる行為者態（*maN*、*maC*、*-um*）と、動作主以外の項が主格となる 3 つの非行為者態が存在する（被動作主態 *ən*、場所態 *-an*、周辺態 *i* の対立）。それぞれの態は現在・過去時制の区別があるほか、動作主態は、アスペクト、意志性、時間的持続性、相互性、随伴的行動か否かによって接辞が入れ替わる。最後に、自動詞・他動詞に関わらず、反復・継続・参与者の複数性などは、動詞語根の重複を伴う場合がある。それが表す意味や語基のクラスによって *C_{1a}* から、*C₁V₁:C₂V₂C₂* まで、少なくとも 6 つの重複形が存在する。

[B-4]

タガログ語の重複と反復の形式と意味

長屋 尚典

重複と反復はともに言語形式を繰り返す操作である。重複が語の全体または一部を繰り返すのに対して、反復は語より大きい単位を繰り返す。本発表では、タガログ語の重複と反復について、新しいデータを加えながら、共通点と相違点を明らかにする。本発表の主な観察と主張は次の通り。第一に、タガログ語の重複には今まで指摘されていない意味がある。否定極性表現、排他性、侮蔑、丁寧な依頼などである。第二に、重複と意味の関係は、不規則的ではなく、共起する要素によって予測可能である。第三に、タガログ語の反復は属格標識やリンカーなど別の語を必要とする統語現象である。意味的には動作の反復、程度の高さ、プロトタイプ性を表現する。最後に、重複と反復は形式的にも意味的にも区別される。重複と異なり、反復は繰り返す要素の間に別の要素が入ってもよい。重複に比べて、反復は生産性が高く、表す意味も規則的であり、類像的な意味しか表さない。

[B-5]

シベ語の動詞接尾辞-mi, -Xei の機能とツングース諸語における述語人称標示

児倉 徳和

シベ語（ツングース諸語）の動詞接尾辞-mi、-Xei はそれぞれ非現実、完了の定動詞と分析され、共通して聞き手への情報伝達の機能を併せ持つ。シベ語ではツングース諸語に広く見られる述語人称標示が失われているが、本発表では、-mi と-Xei の来源の検討を通しツングース諸語における主語人称標示の発展の過程を論じ、以下のことを主張する。

- (1) -mi と-Xei はそれぞれ他の言語の、現在定動詞、過去定動詞の一人称単数の形式に対応する。
- (2) ツングース諸語における定動詞の述語人称標示は、①全ての人称・数について述語人称標示が行われる（ウデヘ語等）②全ての人称・数について述語人称標示が行われるが、話し手が事態を直接経験した場合に用いられ、特に三人称単数の形式が用いられない（ナーナイ語等）③一人称単数の形式が全ての人称に用いられる（シベ語等）、と類型化され、統語的な主語人称標示が失われた一方で一人称単数の標識が統語的な人称標示から、一人称と結びつきの強い直接経験を経て、シベ語では主語の人称と関係しない聞き手への情報伝達へと機能を変化させたと考えられる。

[B-6]

ウズベク語の動名詞節における主語の格選択について

日高 晋介

本発表では、ウズベク語において、述語に所有人称接辞が付きかつ属格主語ではない用例を考察対象とすることによって、属格主語が許されない条件を明らかにすることを目的とする。

述語に所有人称接辞が付されていれば属格主語が想定できるという前提で、以下のような調査を行った。まずコーパスで動名詞節を抽出し、それらの主語の格や述語に所有人称接辞が出るかどうかという観点で用例を整理する。次に、述語に所有人称標示が出ているが属格主語ではない用例に関して、属格主語が想定できるかどうかを、コンサルタント二名の協力をもとに調査する。

その結果、先述した前提に反して、属格主語が想定できない用例が現れた。それは統語的制約がかかる場合と *-(i)sh + mumkin* [possible] / *kerak* [necessary] 構文の場合であることが明らかとなった。後者の場合、「人魚構文」(角田 2011) との類似も指摘する。

[B-7]

ラワン語の 2 つの形容詞

大西 秀幸

ラワン語には、性質を表すような動詞語根が名詞の直後に現れ、2語で名詞句を形成するような形式がある。一例を挙げると、/ *tsā lā* / 「きれいな鳥」(「鳥」 + 「美しい」) というものがある。*lā*は形態統語的特徴から動詞の一種とみることができるが、他の動詞と違って、名詞の直後に現れ、名詞を修飾できるという特徴をもつ。このような特徴を共有する動詞のグループを「形容詞的動詞」と呼ぶ。/ *tsā lā* / のような名詞句は先行研究で複合語として扱われてきたが、派生や屈折をする際、前項にも後項にも接辞がつけられるという複合語とは異なる特徴を持つ。さらにラワン語には名詞化接頭辞 *an̄* を伴う派生名詞が、形容詞的動詞と同じく名詞の直後に置かれ、修飾関係を作る例も見られる。これを形容詞的名詞と呼ぶ。発表では、形容詞的動詞と形容詞的名詞の異同を示した上で、両者は複合語ではなく、名詞句構造の一種として扱うべきであると指摘する。

[C-1]

ウェールズ英語における平叙文と Yes/No 疑問文イントネーションの基本パターン

新城 真里奈

本研究では、伝統的な WE の平叙文および Yes/No 疑問文 (Y/N 疑問文) の基本的なイントネーションパターンを明らかにする。複数の WE 話者の音声データを分析した結果、図 1、2 に示すような基本パターンが示唆された。

〈平叙文〉

前頭部： low –mid 程度の平板。

頭部：最初の強音節は mid 程度で後続弱音節で high まで上昇。

核音調：上昇調系の音調も多いが下降調系の方が頻度はやや高い。

〈Y/N 疑問文〉

前頭部： mid 程度から (extra-)high まで上昇するか high の平板。

頭部：最初の強音節は mid かそれより低い高さまで下がる。後続弱音節徐々に下降するか、平叙文と同様上昇する。

核音調：下降調系の音調も観察されるが上昇調系の音調の方が頻度は高い。

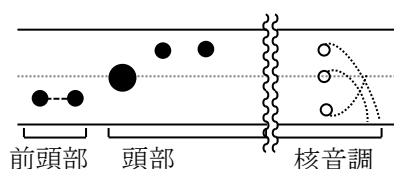


図 1. WE 平叙文の基本パターン

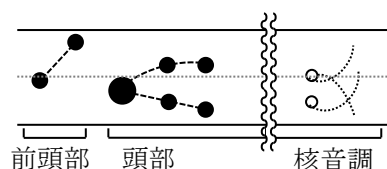


図 2. WE Y/N 疑問文の基本パターン

上記の結果に加えて、より若い世代の WE は、後続弱音節での上昇の幅や頻度を下げるなど、WE らしい特徴を目立たなくする形で変化してきていることも明らかとなった。

[C-2]

日本語を母語とする韓国語学習者の語頭平音・激音・濃音の知覚判断：

初級および上級学習者と母語話者の比較から

韓 喜善

本研究では、語頭平音・激音・濃音の知覚判断実験を行い、日本語母語話者で韓国語初級および上級レベルの学習者（以下、初級学習者、上級学習者と称する。）と韓国語ソウル方言話者の両者を比較した。子音部と母音部の入れ替え実験に加え、VOT、F0、後続母音の開始部の影響について調査を行なった。

実験の結果、初級と上級学習者両方ともに、平音・激音・濃音の知覚判断が可能であった。先行研究における、初級学習者は語頭平音・激音・濃音の判断が困難であるという結果とは一致しなかった。さらに、学習者が母語話者と同様、後続母音によって平音・激音・濃音を判断していることが明らかになった。

[C-3]

ロシア語の縮小辞形成にみる生成文法的側面

渡部 直也

ロシア語の男性名詞の多くは3種の接尾辞 (-ok, -ik, -ïik) のいずれかを付加することで縮小辞を形成するが、接尾辞の選択傾向についてこれまでほとんど研究されてこなかった。本研究では接尾辞の選択傾向を調べるため、ロシア語母語話者を対象に新語・外来語からの縮小辞形成を調査した。その上で、語末の子音あるいは次末の音韻環境ごとに、調査全体を通してそれぞれの接尾辞が選択された割合と、辞書から収集した従来語の派生パターンにおけるそれとを比較した。結果として、両者の傾向は種々の面で異なることがわかった。本発表では、こうした違いが (i) 鼻音の統一的性質 (ii) アクセント移動の忌避 (iii) 硬口蓋化の忌避といった性質に関係していることを示し、縮小辞の形成が、従来語からの類推とは異なった生成音韻論的な原理に一定程度従うことを指摘する。

[C-4]

ラテン語における ti 語幹名詞の母音階梯について

大西 貞剛

接辞*-ti-は印欧祖語に再建される接辞であり、母音を持たないゼロ階梯の動詞語根に付加され、抽象名詞を派生すると想定されてきた。しかしながら、動詞語根がゼロ階梯に遡るとは思えない形式も数多く残されている。この問題に対し、本発表では接辞*-ti-を持つ形式としてラテン語に残されている語形を収集して語根構造に従って分類し、語根構造と母音階梯との関係について考察する。その結果、ラテン語において母音階梯がゼロ階梯ではなく e または o を持つ標準階梯に遡ると考えられる形式の大半は、語根末に閉鎖音もしくは s を持つ CeC(C)-という構造、もしくは語根末に喉音(laryngeal)を持つ CeH-という構造を持つということが明らかになる。その背景にはゼロ階梯の CC(C)-という音連続が許容され得なかったかもしくはこの構造の語根にはゼロ階梯の一般化が生じなかったことが想定される。また、上記の構造の語根を持たないにも関わらず、標準階梯（とりわけ o 階梯）に由来すると考えられる例外的な形式が見つかる。

[C-5]

カクチケル語 VOS 語順の産出に及ぼすアクセシビリティの効果

久保 琢也, 小野 創, 田中 幹大, 小泉 政利, 酒井 弘

これまでの研究では、目的語が主語に先行する語順 (OS 語順) の産出は被動者のアクセシビリティを高めることによって促進されると予測されている。しかしながら、VOS 語順に関してはこれまで殆ど検討されておらず、上記の傾向に従うか否か明らかではない。そこで、本研究はグアテマラで話されているマヤ諸語の 1 つであるカクチケル語を対象に、VOS 語順の産出に及ぼすアクセシビリティの効果を検証した。実験はアクセシビリティの指標として談話的卓立性 (discourse saliency) を操作した絵描写課題であった。実験の結果、VOS 語順の産出は被動者のアクセシビリティを高めても促進されず、むしろ動作主のアクセシビリティを高めることによって促進される傾向にあった。この結果をもとに、本発表では VOS 語順が他の OS 語順とは異なる処理過程を経て産出されていることを主張する。

[C-6]

ナワトル語イシュキワカン方言における定性と 2 種のコピュラ文

佐々木 充文

本発表では、ナワトル語 (メキシコ、ユート・アステカ語族) の未記述の変種であるイシュキワカン (Ixquihuacan) 方言のフィールドワークに基づき、同方言に現れる定冠詞的小辞 *n* と、同方言で用いられる 2 種類のコピュラ文との関係について論じる。同方言では、通常のゼロコピュラ文 (単純コピュラ文) に加え、ダミーの代名詞が補語の直前に現れる別のコピュラ文 (*yēn* 文) が存在し、両者は相補分布する。発表では、定冠詞的小辞 *n* の分布を手掛かりに、これら 2 種類のコピュラ文が、Declerck (1988) その他で提案されている「述定文」と「特定文」の区別に対応していると分析する。つづいて、述定文に単純コピュラ文が、特定文に *yēn* 文がそれぞれ用いられる理由を、補語の統語的性質とイシュキワカン方言の文法的特徴から統語的・機能的に説明する。

[C-7]

バスク語の 2 種類のコピュラ文の類型論的な位置づけ

石塚 政行

バスク語にはモノのサマを述べる 2 種類のコピュラ文がある。

- (1) a. *alai=a* *da* b. *alai* *dago*
 陽気=SG COP.PRS.A3S 陽気 COP.PRS.A3S
 「彼は陽気だ (陽気な人だ)」 「彼は陽気だ (陽気でいる)」

これらのコピュラ文は形式的には次の 2 点で異なる。まず、a のコピュラ動詞は *izan* が、b は *egon* が使われる。次に、a のコピュラ補語は主語の数と一致する接語 =a を伴い、b は伴わない。意味的には、a は恒常的属性を、b は一時的状態を表す。

本発表では、a タイプを名詞句コピュラ文と、b タイプを所在文と関連づけ、バスク語におけるこのような形式的差異と意味的差異の対応が、類型論的に孤立したものでないことを示す。特に、バスク語の a/b に対応する区別を持つ言語では、二次述語として用いられるのは a ではなく b タイプのコピュラ補語である、という仮説を提案する。

[D-1]

Deictic Directionals in Kalanguya, Northern Philippines

Paul Julian Santiago

This paper examines the uses and semantics of two second-position deictic directionals, *la* (from *law* 'go') and *ali* (from *ali* 'come'), in Kalanguya. The findings of the study are as follows: (1) *la* indicates motion away from the deictic center, while *ali* indicates motion toward the deictic center. (2) When the motion is neither away from nor toward the speaker, the deictic center is simply the location where the motion starts or the default location of the object. (3) Both can occur in non-verbal clauses such as existentials and nominal predicate clauses. (4) Their occurrence helps hearers disambiguate reference to participants especially in complex events. (5) Finally, *la* is used with past temporal adverbs, whereas *ali* signals futurity.

[D-2]

中国語の中間経路表現に関する一考察—日本語との対照も兼ねて

鄭 若曦

中国語では移動の中間経路を表す際、中間経路にあたる名詞句(“トコロ”)は、移動動詞“过(guò:通る、渡る)の直接目的語として現れることもあれば(“过+トコロ”)、起点標識“从(cóng)”の目的語として現れることもある(“从+トコロ+过”)。先行研究では、両者の役割分担について意見が分かれている。本発表の前半は、両者が移動の過程を焦点化する点で共通していると指摘した上で、“从+トコロ+过”にのみ見られる幾つかの統語的特徴(方向補語“来”“去”、空間相対名詞、時間副詞との共起状況)を検討し、“从+トコロ+过”を「話し手に対する移動主体の位置変化」を捉える表現だと特徴付ける。発表の後半は、日本語では同じ事態を表すのに「から」も「通る」も現れないことに注目し、“从”と「から」の意味拡張の範囲の違いや、“过”は移動表現の「を」格と近い役割を果たしており、意味の希薄化が起こっている、といった角度から説明を与える。

[D-3]

日本語とスペイン語の1人称主語受身文—会話文テキストにおける

志波 彩子

会話文テキストにおける日本語とスペイン語の1人称主語受身文(典型的有情主語受身文)を比較すると、スペイン語では、動作主の想定が希薄である受身文が多いため、行為の方向が逆であるという意味が読み取りにくく、主語の社会的な属性を表すものに類型が偏っている。また、用例は3人称主語の受身文が大半を占めることから、スペイン語の受身文は客観的な(視点的に中立な)表現であるとも言えるだろう。

一方、日本語では当該の事態に関わるあらゆる有情者が主語に立ちうるため、有情主語受身文の頻度も高く、その類型も多様である。主語に行為や影響を与えた個人の動作主が明示もしくは想定されていることが多く、主語に行為や影響が向かってくる、ないし影響を受けるという意味を表すタイプが大半を占める。また、主語の8割が1人称であることも特徴的で、話し手(視点者)が行わないし影響を受けることを生々しく述べるタイプの受身文が主流である。

[D-4]

仮定条件の仮定性と前提性について—日韓対照研究—

金 智賢

本発表では、日本語と韓国語の条件表見の中でも、特に仮定的条件（「ば」「**myeon**」）と前提的条件（「なら」「**damyeon**」）を取り上げ対照分析することで、両条件の語用論的連続性において日韓で違いがあることを明らかにすると同時に、本発表で定義する概念や述語で各条件形式の意味用法を再考察する。語用論的連続性とは、二つ以上の形式が同じ条件表現に用いられ得ることを指す。日韓で語用論的連続性の違いを生み出すのは、各形式において、話し手が自分の知識世界の中の情報を強い因果関係で結びつける「仮定性」と、条件節の命題を他所から得られた情報として提示する「前提性」の程度に違いがあるためである。本発表では、日韓で違いを見せる文脈と発話を分析し、「仮定性」は、「**myeon**」>「ば」>「なら」>「**damyeon**」の順に高く、「前提性」は、「**damyeon**」>「なら」>「ば」>「**myeon**」の順に高いことを主張する。

[D-5]

日本手話における否定的談話標識としての首ふり表現

南田 政浩, 松岡 和美

日本手話において横の首ふりが「否定」を表すことは広く観察されている。本研究では先行研究では報告されていないタイプの談話標識 **hs**（訂正 **hs**）が存在し、それが否定 **hs** とは異なる統語的・意味的特徴を備えていることを明らかにする。訂正+強調の首ふりは「眉寄せ・目細め」という特定の非手指表現と共起し「相手が言ったことを訂正」および「禁止・命令など強いニュアンスを与える」二つの機能を持つ。訂正 **hs** が文末に現れる場合は「訂正」「強調（禁止・命令など）」「否定」の3つの意味が含まれる。訂正 **hs** と否定 **hs** は一つの文の中では共起できない。文末語順の訂正 **hs** が否定 **hs** に機能を追加する形で「融合」を起こすことは、手話言語が規則性を持たないジェスチャーの集合体ではなく、語順に基づく文法的性質を持つ言語であることを強く示唆する。

[D-6]

日本手話の「違う」：手指表現優位型の否定表現

原田 なをみ, 高山 智恵子

従来の手話言語の類型的な研究では、主に非手指表現と手指表現の関連に着目して否定表現の研究が進められてきた。本発表では、日本手話の否定を表す主要表現の中でも文法的要素なのかが確定していない「違う」に焦点をあてる。おそらく音声言語の機能範疇に相当すると思われる非手指表現と異なり、日本手話の語彙表現としての否定語は使用例も多数存在し、定義づけも一定でない。「違う」に関しては、例えば「メタ言語的否定を表す否定語」(市田 2005) というように、談話的な否定表現と捉えられてきた。しかし、「メタ言語的否定」という概念自体、既存の文法理論においてどのような意味を成すのか明確ではない。日本手話の「違う」が「メタ言語的否定」なのか、それとも統語における否定語としての性質を持つのかどうか、日本手話の「違う」および否定に関する表現の基本的な性質を、統語論および意味論の観点から考察した。

[D-7]

動詞のスケール構造と二種類の Measure Phrases の分布について

田中 英理

本発表は、英語の動詞と measure phrases (MPs) の共起に関して、形容詞と MPs の共起と同様に「最小値を持つスケールを前提とする」(Sawada and Grano (2012)) ことを主張する。動詞と共起する MPs は、動詞のタイプに依存して *by* を伴う場合とそうでない場合がある。前者は、後者よりも分布が制限されており、典型的には状態の変化を表す場合に生じ(e.g., *The temperature dropped by 5 degrees./The road widened by fifty cm.*)、空間的移動では許されない(e.g., **John walked by five kilometers./*Galileo dropped the balls by 55 meters*)。ところが、空間的位置変化を表す *rotate* 類 (他に *swivel, tilt, incline* など) では、*by*-MPs を許す。本発表では、*rotate* 類及び状態変化動詞と *walk* のような空間移動を表す動詞は、*slightly* との共起に関して異なる分布を示す。*slightly* は最小値を持つスケールに基づく形容詞と共起する。同様に、*rotate* 類は、空間における最小値を有するスケールであると分析することができることを示す。

[E-1]

沖永良部語正名方言における動詞「あるく」の文法化

ハイス・ファン・デル・ルベ

沖永良部語正名方言におけるテ中止形+動詞?akkimu (あるく) 形式では、動詞?akkimu がその語彙的な意味を失い、次の用例のように、反復という文法的な意味をあらわすようになった。?utu=wa φunuja hi:dzu <bi:ru>=be: nudi ?akkimu (弟は最近しょっちゅうビールばかりを飲んでいる)。この形式の使用は、意志動詞でなければならないという動詞の語彙的な意味の種類と、主体にある程度の有情性が必要とされるということと、空間的な限定されていない場合しか用いられないことに限定されている。本発表では、その述語形式をもつ文を対象に、テンス・アスペクトの観点から分析・記述を行い、この形式が使用される条件を明らかにする。その上で、?akkimu がアスペクト的な意味をあらわすことが報告されている正名方言と同じ北琉球語群に属する他の方言(国頭村奥、今帰仁村謝名、久米島謝名堂)をとりあげ、諸方言の文法化の程度の違うことを指摘した上で、正名方言の「あるく」の文法化の過程における位置づけを示す。

[E-2]

前期近代朝鮮語における形式名詞 kes の文法化

小山内 優子

現代朝鮮語の形式名詞 kes は、物や人などの具体物を指したり、補文節を形成したりする他に、モダリティ標識としても使われるが、中期朝鮮語(特に 15 世紀)ではもっぱら具体物を指していた。本発表では、中期朝鮮語の次の前期近代朝鮮語において形式名詞 kes がどのように用いられているかを明らかにする。調査の結果、非現実連体形 -l が先行する kes には、話者の意志や推測、非実現の事態を表すモダリティ標識に文法化した例が数多く見られた。文法化したと判断する根拠は次の 2 点である。第一に、一般に終止形や接続形の前にのみ現れる丁寧の接尾辞が kes に先行する連体形内部に現れうる。第二に、形態上は kes に対格助詞がついた形であってもこれを受ける上位述語が無く、全体で接続語尾のように振舞う場合がある。このような文法化の例は kes に現実連体形 -n が先行する場合には見られないことから、現実連体形よりも非現実連体形が先行する環境で先に起こった可能性がある。

[E-3]

現代朝鮮語の補助動詞 ‘nohta’ について—[V1+PUT] 研究—

黒島 規史

朝鮮語には ‘PUT’ という語彙意味を持つ動詞に ‘nohta’ と ‘tuta’ があり、それぞれ文法化し日本語の「(て)おく」のように補助動詞として用いられる。本発表では特に前者を扱い、コーパス調査に基づき補助動詞 ‘nohta’ の意味機能の一端を明らかにする。

‘V1 nohta’ の V1 はヴォイス接辞を取りうる、客体の位置、状態の変化を表す動詞であることが多く、そのような場合、過去連体形や、接続形の ‘-ko’ (-て) で現れる傾向がある。上記の事実に加え、V1 が他動詞的な ‘漢字語+sikhita (させる)’ を取る例などから、‘V1 nohta’ を用いることで客体への働きかけではなく、動作の結果に焦点が当てられるということがわかる。

併せて、他言語における [V1+PUT] との対照という観点から ‘V1 nohta’ の位置付けについても指摘する。

[E-4]

日本語の補助動詞構文「ておく」の意味

古藤 博子

本研究では、日本語の補助動詞構文「ておく」について、意図性に着目した中核的意味特徴の提示を試みる。また、その意味構造の根拠を、文法化の観点から動詞「おく」の意味に求めて論じる。「ておく」は種々の意味・用法が検討されてきた他に、単一の総合的意味記述（大場 2005、菊地 2009）が示されている。例証には、作例や小説などの書き言葉が用いられてきた。本研究は、会話コーパスでの使用事例とその周辺会話による話し言葉の分析を踏まえて考察を行う。その結果、「ておく」の意味特徴を「後の時点で起こると想定される〈好ましくない状況〉を回避しようとする意図に基づく行為を示す」と捉えた。これは、動詞「おく」の空間を占めるという行為の領域が時間へと抽象化されて、〈好ましくない状況〉が起り得る時点までの時間軸上を行為の結果状態が占めることにより、その状態が潜在的効力として保持される意味構造を反映していると考えられる。

[E-5]

日本語における態の選択
—動詞「支える」のコーパス言語学的ケース・スタディー—

ルディ・トート

能動文とそれに対応する二受動文を同一の述語項構造から派生させる最適性理論的分析が可能であるという仮説の検証の一環として、国研の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の図書館サブコーパスから動詞「支える」の能動形(833 用例)と二受動形(159 用例)のどちらかを含む文(合計 992 用例)を抽出し、Bresnan et al. (2007)の英語の与格交替を巡る研究を手本に、態の選択がどのような要因によるかをロジスティック回帰の統計方法を用いて調べてみた。用例の選び方と付加情報の書き方について議論の余地がある点も考えるが、動作主と受動者のそれぞれの有情性及び情報の新旧(あるいは直示)、そしてそれぞれが文内の他の節の主語の参与者と同一であるかどうかと、前文脈に他の動詞のラレ形が用いられているかどうかと動詞「支える」がどの意味で用いられているかという要因が態の選択に有意な影響を及ぼすことを示す。

[E-6]

青森県津軽方言の接尾辞「サル」

大槻 知世

津軽方言には「笑わサル」(つい笑ってしまう)のような「サル」という形式がある。発表者による調査の結果、一部の東日本方言と同じく津軽方言の「サル」も自発を表し、「本置がサッてら」(本が置かれている)、「このペンよぐ書がサル」(このペンはよく書ける)等の一種の受身や可能としても用いることが確認された。なお、弘前市周辺で尊敬の用法も見られたが、自発に比べて文脈や地理的分布がごく限られる。この「サル」の起源はよく知られておらず、本発表では、接続と活用という形態統語論的観点から、かつての中央語の使役・尊敬の助動詞「す」と受身・可能・自発・尊敬の助動詞「らる」による「せらる」の蓋然性が高いことを主張する。「サル」の起源には「せらる」の他に、連結要素の s 音に由来するといった説明があるが、助動詞の「す」と「らる」の結合を起源とする説明が可能であると主張する。

[E-7]

「秘義化(esoterogeny)」によるムラブリ語の方言分岐

伊藤 雄馬

ムラブリ語（オーストロアジア語族、タイ・ラオス）の A 変種と B 変種は文法体系が一致する一方で、基礎語彙の共有率は借用や意味変化などにより 61%と低い。また、無作為に選ばれた語彙においても共有率が約 60%であることから、借用などが基礎語彙に偏ることが分かる。先行研究ではこれらの事実を指摘するのみであったが、本稿は自集団のコミュニケーションが他集団に理解されないように意図的に行われる言語変化、いわゆる「秘義化 (esoterogeny)」により解釈を試みる。つまり、「秘義化」によって迅速に語彙が置換えられたことで、文法体系が変化する前に共有率が低くなったと解釈する。また、借用などが基礎語彙に偏るのは、周辺的な語彙よりも基礎語彙を置換える方が、異集団とのコミュニケーションの遮断を図るのに効果的であるためと解釈できる。加えて、対応しない語彙や意味変化の傾向が「秘義化」によって解釈しうることを示す。

[F-1]

佐賀県北方町周辺方言における 3 拍 5 類の対応がアクセントの歴史研究に与える示唆

五十嵐 陽介, 平子 達也

九州の西南部の大部分では、語の長さに関わらず 2 種類のアクセント型が対立する「二型アクセント体系」を有する方言（「西南部九州諸方言」）が話されている。本発表が主要な分析対象とする佐賀県旧杵島郡北方町周辺の方言も西南部九州諸方言のひとつとされる。先行研究によると、西南部九州諸方言の祖体系も二型体系を持つという。しかし我々の調査の結果、北方町周辺方言では、アクセント語類（日本祖語に仮定されるアクセント型によって区別される語のグループ）の 3 拍 5 類に、1 対 2 の対応が観察されることが明らかにされた。類似の対応は 3 種類以上のアクセント型の対立する他の九州諸方言にも観察される一方で、鹿児島方言等の大部分の西南部九州諸方言には観察されない。これらの事実は、定説とは異なり、西南部九州諸方言の祖体系に 3 種類以上のアクセント型の対立を認めることでもっともうまく説明できる。

[F-2]

西之表方言におけるアルファベット関連語彙のアクセント

荒河 翼

鹿児島県の諸方言におけるアルファベット関連語彙のアクセント（以後 **AlphAcc**）に関する先行研究は、「数える単位」が音節である方言（薩摩川内市方言等）では音節数が **AlphAcc** に関与するのに対して、「数える単位」がモーラである方言（甕島方言等）では音節数が **AlphAcc** に関与しないことを報告している。本研究は、「数える単位」がモーラである鹿児島県種子島の西之表市西之表の方言（「西之表方言」）における **AlphAcc** を調査した。その結果、①音節数が **AlphAcc** を決定すること（2音節以上→A型、1音節→B型）、②「平山の複合アクセント法則」が成立すること、③初頭アルファベットがA型の頭文字語にはB型の場合と比較して、多単位形がより多く出現することが明らかになった。本研究の調査結果は、方言間における韻律的単位（音節 or モーラ）の違いが、**AlphAcc** 決定規則の違いと必ずしも関連しないことを示唆する。

[F-3]

鳥取県倉吉方言における地名のアクセント—尾高型アクセントに注目して—

桑本 裕二，儀利古 幹雄

鳥取県倉吉方言は東京方言と同じアクセント体系を有するが、本発表では倉吉地方およびその周辺に存在する実際の地名 50 語について、東京方言話者が発音するアクセント型が平板型、頭高型、中高型のそれぞれになる語に分類した上で倉吉方言話者によるアクセント型の分布を分析した。その結果、3つの語群はどれも東京方言話者のアクセント型になっている割合が多く見られ、東京アクセントの影響が甚だしいように見受けられるが、同時に東京方言では全く見られない尾高型アクセントの割合がどの分類においても東京と同じアクセント型と拮抗もしくはそれを上回っていることがわかった。尾高型アクセントは東京アクセントの地名には全く現れず、また、倉吉方言においても名前（儀利古・桑本 2013）、苗字（桑本・儀利古 2014）などの語群には存在しないアクセント型であり、尾高型アクセントの存在は当該方言の地名における主要な特徴であるとみなすことができる。

[F-4]

町名のアクセントの平板化—東京方言、名古屋方言、倉吉方言の比較—

儀利古 幹雄, 竹安 大

儀利古 (2012) は後部要素が「町 (ちょう)」である複合名詞 (町名) のアクセントは前部要素の音韻構造によって決定されること、また若年層の方が中高年層と比較して町名を平板型アクセントで発音する頻度が高いことを明らかにした。本研究では、儀利古 (2012) で調査された東京方言に加え、名古屋方言、鳥取県倉吉方言でも同様の調査を実施し、(i) 程度は地域によって異なるが、どの地域においても若年層の方が中高年層よりも町名を平板型アクセントで発音する頻度が高い (アクセントの平板化が観察される) こと、(ii) しかし、どの地域においても同様の言語内的要因 (音韻構造的要因) が町名アクセントの決定に対して影響していること、(iii) 統計的な分析に基づくと、言語内的要因の方が言語外的要因よりもより強い影響力を有すること、以上の 3 点を主に主張する。

[F-5]

モンゴル語複合語のピッチパターン—音韻構造・意味関係との関連性—

植田 尚樹

モンゴル語の複合語アクセントに関して、これまでに音韻構造および意味関係との関連性が指摘されているが、これまでの研究は体系的であるとは言い難く、不明な点が多い。本発表では、モンゴル語ハルハ方言の複合語のピッチパターンは意味関係とは相関がなく、音韻構造と密接な関係があることを主張する。ピッチパターンに影響を及ぼす音韻構造としては、前部要素の音節数、後部要素の長母音の有無のほか、分節音の種類が挙げられる。具体的には、前部要素の末尾子音が **r** や鼻音の場合は前部要素が高いピッチを持つ傾向にあり、**x** や **t** など無声阻害音の場合は低いピッチを持つ傾向にある。この理由は、前部要素の母音の直後に無声阻害音があれば、母音の無声化が引き起こされ、複合語アクセントを担いにくくなるためであり、アクセントに対する分節音の影響があると考えられる。

[F-6]

アミ語声門閉鎖音に関する再考察

今西 一太

アミ語は台湾原住民語のひとつである。本発表ではアミ語における声門閉鎖音の位置づけを喉頭蓋咽頭閉鎖音、渡り音との関連で再考察する。先行研究では、省略できない場合があるなどの理由で声門閉鎖音は音素とみなされてきた。しかし、本発表では声門閉鎖音は音素ではなく、音節境界を覆うために挿入される音、もしくは喉頭蓋閉鎖音の異音であると主張する。省略できない声門閉鎖音は、喉頭蓋閉鎖音の異音としての声門閉鎖音であり、喉頭蓋閉鎖音は子音と隣接すると声門閉鎖音として実現する。ただし以下の場合が例外的に、子音と隣接していても喉頭蓋閉鎖音のまま実現する。(1) 喉頭蓋閉鎖音を含む形態素で重複が起こっている場合。(2) 語の境界を越えている場合。前者は、二つある喉頭蓋閉鎖音のうち子音に接している方だけが声門閉鎖音に変化することを避ける意味があり、後者は、この規則が語の内部だけに適応されるものであることを示している。

[F-7]

フィジー語における挿入母音と固有母音素性

那須川 訓也, 大沼 仁美, 小泉 政利

本研究では、フィジー語化されていない英単語をフィジー語化する際に観察される母音挿入過程を通して、どのような母音挿入パターンが観察されるかを検証する。さらに、母音挿入パターンを特定したのちに、フィジー語における無標挿入母音を*/i/*であると見做し、なぜその母音がそのような振る舞いをするのかを（音声学的な見地からではなく）音韻構造の観点から論じる。具体的には、主要母音素性である[mass], [dip], [rump] (Backley 2011) の中で、フィジー語は[dip]を固有要素（主要部）として分節内表示を構築する言語であると考えられる。そのため、固有素性である[dip]が単独で音声解釈された際の音形である前舌狭母音が挿入母音として出現しやすいと言える。*/i/*のみならず、[dip]を内部構造にもつ*/e/*も、*/i/*の次に、挿入母音として用いられる頻度が高いのは、この理由によるものだと言える。

[G-1]

On the Wh-Island Effect by Native Speakers of Japanese: A VAS-Based Analysis

Lina Bao, Megumi Hasebe, Toshiro Umezawa, Hideki Maki

This paper investigates whether native speakers of Japanese will exhibit the Wh-Island effect for argument wh-phrases based on a questionnaire-based survey, and confirms (i) the Wh-Island effect by argument wh-phrases in situ, and (ii) the Wh-Island effect by argument wh-phrases that have been scrambled to the sentence-initial position. Therefore, the present study makes it clear that native speakers of Japanese actually show the Wh-Island effect for argument wh-phrases. Furthermore, on the basis of Old Japanese data, we also argue that [-Q] C and D have an edge feature in Japanese (Old and Modern), which may agree with the wh-feature of a wh-phrase in situ.

[G-2]

The Absolutive/Genitive Alternation in Selayarese

Hideki Maki, Hasan Basri

This paper examines the absolutive/genitive alternation in Selayarese, an Austronesian language spoken on the island of Selayar in the Indonesian province of Sulawesi Selatan, and attempts to elucidate the mechanism behind the case alternation. In this paper, based on the data we collected, we will argue (i) that a genitive NP is licensed by the adnominal form of the predicate along with a nominal head in Selayarese, (ii) that wh-movement does not make the predicate adnominal in Selayarese, unlike Chamorro, where wh-agreement licenses genitive subjects, and (iii) that not only XP movement, but also clitic movement, delete intermediate COMPs in Selayarese.

[G-3]

Extraction from the Complement Clause of the Factive Predicate *Is Trua Le*
'To Regret' in Irish

Dónall P. Ó Baoill, Hideki Maki

This paper closely examines data that involve wh-extraction from the complement clause of the factive predicate *is trua le* 'to regret' in Irish, and based on the newly found data, we will argue (i) that the complementizer *go/gur* 'that' in Irish optionally has an operator in its SPEC position, which in turn moves to a higher CP SPEC, contrary to McCloskey's (2002) claim, (ii) that a barrier should be defined in terms of a non-maximal projection of a category, (iii) that Irish allows an invisible COMP, which can host an operator, and (iv) that Irish has two types of [+Q] COMPs, one that attracts a wh-phrase in overt syntax, and another that does not.

[G-4]

A hybrid analysis for LF-intervention effects:
Polarity sensitive items as genuine LF-interveners

KOBAYASHI Ryoichiro

The main aim of this study is to criticize Tomioka's (2007) pragmatic account of the LF-intervention effects (IE), and to claim that Polarity Sensitive Items (PSIs) are genuine syntactic interveners. I will examine the parallelism among PSIs in IE configurations, which is distinct from other interveners, and further claim that the study of IE should not be monolithic, but hybrid: Syntactic LF-interveners (PSIs), blocking scopal interactions/Pragmatic interveners, causing illegal information structures. The predictions will be borne out that PSIs actually cause IE in other contexts as well, which pragmatic accounts cannot explain (Funakoshi & Takahashi 2014). Such hybrid perspectives bring back enormous findings on IE (e.g. LF *wh*-movement) to the field of syntax, without relegating all of them to pragmatics.

[G-6]

日本語における、述語の語幹で終わるフレーズ同士の等位接続

矢田部 修一，谷川 恵

本論文の目的は、「ハナコが山へ、マサオが川へ行った」のような文の統語構造を正確に決定することである。このような、いわゆる右節点繰上げ構文に関しては、たとえ、範疇文法に基づく分析は誤りであると考えて句構造文法に基づく分析を採用するとしても、その統語構造として次の2つの可能性が考えられる。

[[Hanako ga yama e (itta)] [Masao ga kawa e itta]]

のように、時制節2つが等位接続された構造において、時制辞で終わる部分（この例の場合は「itta」）が右節点繰上げを受けた、という可能性と、

[[[Hanako ga yama e (ik-)] [Masao ga kawa e ik-]] -ta]

のように、時制を持たない節2つが等位接続された構造から、述語の語幹で終わる部分（この例の場合は「ik-」）が右節点繰上げを受けた、という可能性である。これら2つの分析のうち、前者だけが適用可能なケースも、後者だけが適用可能なケースも、どちらも存在するというを示す。

[G-7]

逆スコープ解釈と場面描写

林下 淳一

一般的に、スコープ解釈に関する直感は全て言語装置が直接作り出す意味表示 (semantic representation) によると仮定されている。しかし Hayashishita (2013) はこの仮定が逆スコープ解釈では成立しないことを示し、逆スコープ解釈の意味表示は言語装置から直接作り出されるのではなく、言語装置外の操作が関与していると主張している。

本発表では、話者が逆スコープ解釈の直感を持つときは、その解釈と合致する場面を念頭に置き、それを描写していることを示す。そして、逆スコープ解釈の意味表示は、その際に作られる場面表示に言及して、言語装置から直接作り出される意味表示を変更することにより得られるものであると論ずる。つまり、Hayashishita (2013) の言語装置外の操作というのは、言語装置が作り出す意味表示を場面表示に合わせるための操作であると理解することができる。

[H-1]

日本語の述語繰り返し構文による極性の強調について

石原 由貴

時制をもった動詞、形容詞、形容動詞を繰り返す日本語の述語繰り返し構文は、動作や状態の程度や頻度を強調するのに用いられるほか、Yes/No 疑問文の答えとして極性を強調するのにも用いられる。本発表では、否定形の述語がYes/No疑問文の答えとして繰り返されるのはどのような場合なのかを考察する。

「読まなかった読まなかった」のような否定形の繰り返しは、肯定疑問文に対する答えとしてはあまり容認度が高くないが、否定疑問文の答えとしては許される。また、時制辞マーカーが明示的につかない「ない」で終わる述語の繰り返しは容認度が高い。そこで、Holmberg (2013)を援用し、TPよりも高い位置に「うん/はい」「ううん/いいえ」と一致するPol(arity)を仮定し、移動のコピー理論に基づいた分析を試みる。

[H-2]

Plain Anaphor としての「お互い」および「自分自身」と束縛原理(A)の循環的解釈

加藤 静華

自然言語には Plain Anaphor と Exempt Anaphor という二種類の照応形が存在する。Plain Anaphor は束縛原理(A)に従うが、Exempt Anaphor は束縛原理(A)に従わず、先行詞の決定には視点(point of view)が重要な役割を果たす。日本語の「お互い」および「自分自身」は束縛原理(A)に従うとされているが(中村 1996)、補文の主語に位置する「お互い」および「自分自身」については、Plain Anaphor か Exempt Anaphor か意見が分かれる。

本発表では、Charnavel and Sportiche (2013)による Inanimate な名詞句を先行詞とした Plain Anaphor の分析を日本語に適用し、補文の主語に位置する「お互い」および「自分自身」が Plain Anaphor であることを示す。また、Charnavel and Sportiche (2013)は極小主義アプローチの枠組みの中で、フランス語の Plain Anaphor の分布に基づき、位相理論における束縛原理(A)の循環的解釈を提案している。Saito(2011)による日本語の EPP 素性に関する分析を踏まえ、日本語の Plain Anaphor が束縛原理(A)の循環的解釈によって説明しうることを示す。

[H-3]

Modal Phrase の再検討—東京方言「だろう」及び「まい」と肥筑方言「めえ」の違い—

木戸 康人

Koizumi (1993)以来、生成文法の枠組みから日本語には TP よりも上部に、話し手の認識を表すための Modal Phrase (=ModP)があることが検証されている。例えば、「だろう」は ModP の主要部に基底生成すると Koizumi (1993)は提案する。「まい」に関しては、NegP の主要部と TP の主要部[-tense]と ModP の主要部という 3 つの主要部の複合体であると、田川 (2006)は提案する。また、漆原 (2011)は、Cinque (1999)が提案した普遍的な機能範疇の階層構造の分析を採用し、「まい」は TP の上に投射される ModepistemicP の主要部に生成すると分析する。

本発表では、「だろう」が基底生成する ModP と「まい」が含む ModP の主要部が同じなのかどうかを検討するために、Rizzi (1997)が提案した CP 領域のカートグラフィーに「だろう」及び「まい」を当てはめる。そうすることで、「まい」が生成される ModP の主要部は、「だろう」が基底生成するそれとは異なると提案する。この提案の妥当性を高めるために、終助詞「わ」と肥筑方言で観察される「めえ」に関する経験的証拠を提示する。

[H-4]

埋め込み節におけるモーダル表現と機能範疇及び主動詞の選択条件の関係について

宗像 孝

モーダル基盤に応じて、異なるモーダルに関する語句が使用され、埋め込み節でも同様である。

- (1) a. 学長は、学則を基に、学部が大に処分を与えるべきだと宣告した
- b. 学長は、専門家の意見を基に、大がオリンピックに出場するはずだと信じ込んでいる

しかしながら、モーダル基盤を要求する主動詞が埋め込み節を取る際に「の」の節の場合、モーダルに関する語句が使用できない。

- (2) a. *学長は、学則を基に、学部が大に処分を与えるべきなのを宣告した
- b. *学長は、専門家の意見を基に、大がオリンピックに出場するはずなのを信じ込んでいる

(2)が非文なのは、「の」の節には、上位機能範疇が存在しないため、モーダル基盤の生成を必要とする主動詞「宣告する」「信じ込む」の選択条件を満たせないからであると考えられる。結論として、モーダル基盤の生成には上位機能範疇が投射される必要がある。

[H-5]

転送操作の領域拡大およびそれに伴う理論的問題についての一考察

中西 亮太

本発表では、極小主義の枠組みにおける転送操作 (Transfer) について考察する。Chomsky (2000, 2001) 以来想定されているメカニズムでは理論的および経験的な問題を呈し得ることを論じ、Richards (2007) や Obata (2010)、Goto (2011) などの議論を踏まえ、位相理論 (Phase Theory) に基づき修正を加えた転送操作を提案する。新たな転送操作においては、従来の想定とは異なり位相全体を転送操作の領域とすることを主張し、Bošković (2007) の提案を発展させ疑問詞句などの循環的移動には 2 種類のタイプがあることを想定することによって、新たな転送操作のメカニズムが移動を伴う派生において理論的問題点を呈さないことを示す。また、位相全体を領域とすることによる併合操作 (Merge) の理論的問題点についても、新たな転送操作を集合理論 (Set Theory) の観点から提案を行うことで回避できることを主張し、経験的事実を通して本発表の提案の妥当性および具体性を示す。

[H-6]

日本語における否定辞移動と短縮応答文

内芝 慎也

日本語では、例えば (1) のような否定疑問文に対して、(2) のように「はい」もしくは「いいえ」のみで返答することができる。(2) のような短縮応答文は、一般的には削除が適用されていると考えられ、削除には LF 同一性条件が課せられる (Merchant 2001, 2004)。しかし、この一般的な削除分析に従うと、(2b) において、先行文 (1) が否定文であるにも関わらず、肯定の解釈が得られるということが説明できない。本発表では、日本語において否定辞が TP の主要部から更に上位の NegP の主要部に LF で移動しているとする Kishimoto (2008) の提案を採用することで、この問題が解消されることを論じる。このことは、主要部移動が LF で行われることがあるということを裏付ける一つの論証となる。

(1) 太郎は 来ないの？

(2) a. はい. (= 太郎は来ない / ≠ 太郎は来る)

b. いいえ. (= 太郎は来る / ≠ 太郎は来ない)

[H-7]

日本語・英語における身体属性表現の統語的・形態的分析

森田 千草

本発表では、日本語の「青い目をした」、英語の“long-haired”のような身体属性表現の統語的・形態的分析を試みる。分詞形態素を有し、身体部位名詞を修飾する形容詞の存在が不可欠であるなど、両言語で共通した特性を持つ一方、日本語では動詞「する」を必要とすることや、英語では形容詞と名詞が複合語を形成することなど、二言語間で異なる特性も見られる。本発表ではまず、身体属性表現は両言語ともに、状態相の機能範疇 Asp_sP を投射しており、その下に形容詞によって修飾された身体部位名詞(の語幹)の投射範疇が現れることを提案する。さらに、日本語の身体部位名詞の語幹は機能範疇 n と結合し名詞となるのに対し、英語では語幹が n と結合しないことや、英語では Asp_s が \sqrt{P} を補語として取るのに対し、日本語では vP が補語となること、さらに名詞修飾を行う形容詞の最大投射範疇が日英語間で異なることを提示することにより、両言語間の身体属性表現に見られる相違を説明する。

■ポスター発表 (11月16日(日) 11:30-12:50)

[P-1]

チベット語東西方言における言語特徴の比較

海老原 志穂

チベット語は、東は中国西北部から、西はパキスタン東北部にわたる広い地域で話され、一般に 6 つの方言に分類される。このうち、チベット語圏の東北端で話されるアムド方言と、西端で話される西部古方言は、チベット書写語と特に対対応関係がみられ、他の方言にはみられない、チベット語の古層を反映した音韻・文法特徴を豊富に有していることが以前より指摘されてきた。さらに、遠く離れた地域で話されているにもかかわらず、両方言には共通する言語特徴がいくつか見つかっている。両方言に関してはこれまでに、音響音声学や初頭子音連続を扱う音韻論的研究が行われてきた。本発表では、この両方言の記述・比較を行う中で確認された、先行研究では指摘されていない共通点、接辞や接語の音韻交替、動詞の形態、1 人称代名詞における除外形・包括形の区別、証拠性を表す存在動詞 *snang* の使用などの言語特徴の分布を言語地図として示し、通時的な視点からも考察する。

[P-2]

愛媛県大島のビレッジサイン（手話方言）における数と時の表現

矢野 羽衣子, 松岡 和美, 平 英司

日本手話は日本語とは異なる言語であり、各地に方言も存在する。しかし手話言語には書記システムがないことから、その記録や保存は困難であった。愛媛県大島の旧宮窪町では少数のろう者が地域固有の手話（ビレッジサイン）を用いて生活をしているが、この手話方言もまた母語話者の高齢化により消滅の危機に瀕している。本研究は危機言語となっている手話言語の記述と保存を目的とするプロジェクトの一環として、数と時の表現を考察する。対象地域出身のろう者が主たる立場に関わっていることも、本研究の特色の一つである。手話類型論の先行研究で示されている通り、愛媛県大島の手話方言においても標準的な日本手話と異なっている部分に、数字の表現および空間を用いた「時の流れ」の表現（Time Line）の空間利用が見られた。同じ国で使われている手話方言間でこのような多様性が見られるという観察は貴重なものである。

[P-3]

福井平野周辺地域におけるアクセントの周圏分布

松倉 昂平

福井県嶺北地方のアクセントの概略とおおよその分布が平山(1953)で明らかにされて以降、福井平野周辺地域の各地には、無型・二型（三国式）・三型アクセントの存在が報告されてきた。しかし以後同地域では詳細な多地点調査が行われず、分布の実態が不明な地域も広がった。本発表では、最近の研究や発表者の調査により明らかになった同地域のアクセント分布を示す。概要は次の3点にまとめられる。(1)福井平野中央部・東部は無型が優勢であり(2)福井平野北部と西部山間地には二型が分布し(3)同地域の周縁に位置し無型と二型の分布域を取り囲む3地域（北部丘陵地・東部山間地・南部山間地）それぞれには、三型と、多型である今庄式が分布する。同地域のアクセント分布は無型を中心にその外側を二型、三型、今庄式が取り囲む4重の周圏分布をなすとみられ、この分布上の事実は同地域のN型や無型の成立過程を復元する上で重要な示唆を与える。

[P-4]

複合動詞の連用形名詞データベースの構築とそれに基づく諸仮説の検証：

生産性・語アクセント・意味特徴

田川 拓海, 松浦 年男

これまであまり焦点が当てられてこなかった複合動詞と対応する連用形名詞について、大型のデータベースを用い、先行研究で提唱された仮説について検証する。

国立国語研究所「Web データに基づく複合動詞用例データベース」の複合動詞リストの複合動詞 1940 語について、1) 連用形名詞の可否（容認度）、2) 連用形名詞の意味タイプ、3) 連用形名詞の場合の語アクセント、という 3 項目の調査を行った。

その結果、以下の 3 点が明らかになった。A) 容認度は全体的に高く、モーラ数の影響、慣用句との共起の観点からも複合動詞と対応する連用形名詞の生産性が高いと言え、容認度が低いものは特定の後部要素に集中していた。B) 意味タイプについてはデキゴト名詞の割合が高かったが、モノ名詞の例も一部見られた。C) 語アクセントについてはごく少数の例を除いて、平板型になった。全体としては先行研究の仮説・予測が具体的に裏付けられる結果となった。

[P-5]

オノマトペを含む教示が嚥下運動に及ぼす影響

水本 豪, 橋本 幸成, 植原 希, 内田 優希, 古閑 公治

医療現場において、強い飲み込み（嚥下）運動を促す際、オノマトペを含む教示が使用される。水本他（2013）では、「飲み込んでください」という教示と「ごっくんしてください」という教示によってどのように嚥下運動に違いが生ずるのかということが筋電図を用いて検討された。本発表では、水本他（2013）の 2 条件に加え、「ごっくんと飲み込んでください」を加え、教示による嚥下運動の違いを検討した。実験は 18～19 歳の大学生 12 名で筋自体の個体差を最低限にするため女性を対象とした。課題は、水 2.5ml を教示に従って飲み込むというもので、課題遂行中の嚥下関連筋の活動を表面筋電図で測定した。その結果、「ごっくんしてください」の場合に、「飲み込んでください」の場合に比べ筋活動持続時間の延長と筋活動量の増加が認められた。一方、「ごっくんと飲み込んでください」の場合には、「飲み込んでください」の場合との間で筋活動に有意差は認められなかった。

■ワークショップ（6月8日(日) 10:00–12:00)

[W-1]

文のプロソディーと語のプロソディー

企画・司会：窪菌 晴夫

日本語のプロソディー研究はこれまで単語レベルの分析が中心であった。語アクセントと文のプロソディーの関係を探る研究は少なく、とりわけ、文レベルのプロソディー現象が語のアクセント・トーンにどのような影響を及ぼすかという研究はきわめて少ない。語プロソディーは文のプロソディーに影響を与えるが、その逆方向の影響はないというのが暗黙の了解になっているように思われる。ところが諸方言のプロソディー研究が進むにつれ、文レベルの要因・構造を考慮しないと語アクセントの特徴が適切に理解できない事例がいくつか報告され始めている。本ワークショップでは語アクセントの研究を文全体のプロソディー研究に展開するための序論として、日本語における語と文のプロソディーを考察し、他の言語に見られる現象と比較対照する。他の言語の例として、時制などの文法構造が語のトーンに影響を与えることが知られてきたバントゥ諸語を取り上げる。

[W-1-1]

鹿児島方言における文のプロソディーから見た語のアクセント

窪菌 晴夫

鹿児島方言は九州南西部の諸方言と同様に、単語の長さとは無関係に2つのアクセント型が存在する。これらのアクセント型は単語・文節レベルでは、文節末音節が高く実現する型（B型）と、その一つ前の音節が高くなる型（A型）に実現する。ところが文レベルの現象（疑問文、呼びかけ文、フォーカスなど）を詳細に見てみると、アクセントの特徴が「文節」のドメインを超えて実現する現象や、アクセント型の区別がなくなる現象（いわゆるアクセントの中和現象）が観察される。本発表では、このような現象を詳述し、文レベルのプロソディーによって語レベルのアクセント型がどのように、かつどの程度変容を受けるか考察する。

[W-1-2]

南琉球宮古語池間方言の語アクセントの中和と文レベルでの実現

五十嵐 陽介

南琉球宮古語池間方言は3種類のアクセント型（A型、B型、C型）を持つが、そのアクセント型は広範な環境で中和する。例えば、2～3モーラ語を単独で、あるいは助詞（接語）付きで発話すると中和が必ず生じる。この事実は、助詞を付加した語のみを観察するという手法では、この方言の語アクセントを捉えることができないことを意味する。一方、2～3モーラ語に2モーラ接語を付加し、さらに述語を後続させた場合、中和は生じない。2モーラの語根2つから構成される複合語に2モーラ接語を付加した場合も中和が生じない。本研究では、2モーラ以上の語根ないし接語が写像される「韻律語」という単位を提案し、3種類のアクセント型の実現のためには3つ以上の韻律語が必要であることを示す。また個々の型が「名詞+接語」の範囲を超えて実現される現象があることを指摘した上で、語アクセントと文レベルの韻律との関係を論じる。

[W-1-3]

ヘレロ語（バントゥ R31）における語のプロソディと文レベルの現象

米田 信子

ヘレロ語では、多くのバントゥ諸語と同様にテンス・アスペクト・ムード（以下 TAM）によって動詞が異なるトーンで現れるが、それだけでなく、動詞に後続する名詞のトーンの実現形も TAM によって決定される。またヘレロ語には「特定の接辞から H が3つ以上並ぶと2つめ以降の H にはダウンステップが起きる」という規則があるが、複文において従属節の動詞にこの規則が適用されるか否かを決定するのは主節の動詞の TAM である。これらはいずれも語レベルのプロソディの観察からは見えてこない現象である。名詞も動詞も共起する TAM によってトーンの実現形が決まるが、さらに詳細を調べると、名詞と主節の動詞の場合は文法的条件によってトーンが決定するのに対して、従属節の動詞の場合には文レベルのプロソディの関与が観察される。本発表では、ヘレロ語の語のプロソディに見られる文レベルの文法構造やプロソディの影響について考察する。

[W-2]

名詞述語研究への新たな話題提示

企画・司会：岩男 考哲

近年、日本語の名詞研究が活発に行われるようになり、その成果には目を見張るものがある。そこで次の段階として、個々の研究間のつながりを考える作業や動詞研究で用いられたアプローチの名詞研究における有効性の検証等の作業が必要となってくる。

これを受けて、本ワークショップの目的は、これまでの動詞研究・名詞研究の成果に基づいて、今後の名詞研究の新たな方向性を探ることにある。具体的には、これまで関連づけられることのなかった諸概念をある同一の現象に対して用いることで何が明らかになるか（発表者1）、コーパスに基づいて量的に名詞を観察することでどういった話題が提供できるか（発表者2）、そして動詞研究では活発に行われている対照研究の手法を名詞述語研究に当てはめると何が言えるのか（発表者3）を報告する。これらの研究を通して、名詞研究の新たな展開の可能性を模索したい。

[W-2-1]

メタ用法の叙述の類型での位置づけ

岩男 考哲

引用形式が名詞句を提示し、いわゆる「メタ的」に扱う現象は「メタ用法」と呼ばれている。この現象についてはこれまで、談話に名詞句を導入する際にどういった働きをするかといった観点からの議論が活発に行われ、成果を収めてきた。

その一方で近年、日本語研究の世界で引用表現に関する研究もめざましい成果を収めている。そこで本研究では、この引用研究の成果に基づいてメタ用法を再度捉え直すと言えぬかを考察したい。

そして、本研究で規定したメタ用法を「叙述の類型」の観点から観察すると、どう位置づけられるかも考察する。これまでメタ用法は、一般の言語記号とは異なる「特殊な」側面が注目されがちであった。それに対して、メタ用法を叙述の類型に位置づける試みは、メタ用法と一般的な言語記号とを同じ視座で捉え直す試みだと言える。

[W-2-2]

出現する位置に着目した「副詞+の+名詞」の研究

建石 始

副詞は用言を修飾するものという定義があるが、実際には「全くの嘘」や「なかなかの成績」のように副詞が「の」を伴って名詞を修飾する場合も存在する。そこで、コーパス（『現代日本語書き言葉均衡コーパス』）を用いて、名詞を修飾する副詞にどのようなものがあるのかに関する調査を行い、使用実態を明らかにする。

次に、副詞が名詞を修飾する場合、項の位置に出現するのか、それとも、名詞述語文の述語位置に生じるのかを分析する。その結果、程度の副詞や量の副詞が「副詞+の+名詞」となった場合は項の位置に出現する傾向が強いのに対して、評価の副詞が「副詞+の+名詞」となった場合は名詞述語文の述語位置に生じる傾向が強いことを指摘する。

さらに、名詞述語文の述語位置に生じやすい「副詞+の+名詞」には、副詞が持っている意味的特徴が関係しているものと、名詞が持っている意味的特徴が関係しているものに分けられることを主張する。

[W-2-3]

ネワール語における *-gu kha*:文とノダ文

松瀬 育子

ネワール語には、名詞化接辞 *-gu* とコピュラ動詞がセットになって文末に置かれる *-gu kha*:文があり、日本語のノダ文と類似した機能を示す。*-gu kha*:文とノダ文の対照では、「先行文脈との関係づけ・非関係づけ」、とりわけ、先行文脈との「因果関係」が重要となる。*-gu kha*:文とノダ文との類似点としては、①因果関係の「帰結」を述べる用法、②三上(1953)で述べられている「指定文（文中のある成分を指定する）」としての用法、が挙げられる。

他方、相違点として、③ノダ文に多用される因果関係の「事情（理由）」を述べる用法が *-gu kha*:文に少ない、④「非関係づけ」の用法が *-gu kha*:文では未発達である、等が挙げられる。①-④から、*-gu kha*:文は「P（事情）→Q（帰結）」の「帰結」を述べる頻度が高い一方で、ノダ文は「P（事情）→Q（帰結）」の「事情」と「帰結」の両方を述べる構文として用法の拡張が進んでいるという言語対照の一般化が得られる。

[W-3]

北東ユーラシア諸言語における否定構造

企画・司会：長崎 郁

本ワークショップでは、北東ユーラシアで話されるサハ語（チュルク諸語）、ユカギール語（系統不明）、アリュートル語とイテリメン語（チュクチ・カムチャッカ諸語）を例に、この地域における否定をめぐる言語現象の面白さについて類型論的観点から論じる。否定構造の類型論としては、否定形態素のタイプや位置による分類が広く知られているが、本ワークショップでは、肯定文と否定文の対称性・非対称性や、非対称的否定をもつ言語において否定形態素の付加によりどのような文法的ドメインが影響を受けるかといった問題も取り上げる。各言語に関する発表では次のような点を議論する。(i) 否定形態素の現れ方と位置、(ii) 否定形態素の数：否定文の種類に応じて否定形態素の使い分けがあるか、(iii) 肯否の対称性・非対称性：否定文は肯定文に否定形態素を加えるだけか、(iv) 非対称性の現れ方：補助動詞等の使用、文法的な対立の解消（現実 vs. 非現実、自動詞 vs. 他動詞）。

[W-3-1]

サハ語における肯否の対称性と否定を含む派生

江畑 冬生

サハ語の動詞は「語幹－派生接辞－否定－動詞語尾－人称・数」という形態法をとる。肯否は否定接辞の有無により表される。否定接辞は、動詞語幹から最も近い位置に現れる屈折形態素である。否定接辞の付加は極めて規則的であり、ほとんどの動詞語尾に否定接辞が先行しうる。

本発表ではまず、サハ語動詞における肯否には高い対称性が見られることを示す。次に、否定を含む派生（形動詞の否定形に派生接辞が付加されることを指す）が生産的であることを示す。否定を含む派生においても、否定要素が同一節内の否定代名詞と呼応し全部否定を表すことがある。つまりサハ語の否定を含む派生においては、派生の語基に過ぎないはずの否定要素が、単に意味的に残存しているのではなく、依然として統語的な力を持っているのだと言える。

[W-3-2]

コリマ・ユカギール語における否定と他動性

長崎 郁

コリマ・ユカギール語の否定は、動詞直前を通常の生起位置とする小詞 *el=* によって表される。否定文に見られる大きな特徴は、肯定文において直説法の動詞活用語尾によって示される自動詞と他動詞の対立が否定文では解消され、自動詞も他動詞も自動詞の活用語尾をとるようになることである：*amde-t't'ek* [死ぬ-FUT-IND.INTR.2SG] 「(お前は)死ぬだろう」／*el= amde-t't'ek* [NEG= 死ぬ-FUT-IND.INTR.2SG] 「(お前は)死なないだろう」, *kimdaan'e-rii-mek* [騙す-APPL-IND.TR.2SG] 「(お前は)騙した」／*el= kimdaan'e-rii-jek* [NEG= 騙す-APPL-IND.INTR.2SG] 「(お前は)騙さなかった」。このような活用語尾における自動詞化は否定に伴われる他動性の低下を示す現象と考えられる。否定小詞は名詞の前に現れると欠如の意味を表わし、その際、動詞自体は否定のスコープには含まれない：*el= and'e nugede-m* [NEG= 目する-IND.TR.3] 「(彼_iは彼_j)を)目なしにした(=彼_iは彼_jの目を見えなくした)」。このような場合には、上記のような自動詞化は起こらず、他動詞文では他動詞の活用語尾がそのまま用いられる。

[W-3-3]

アリュートル語における肯否の非対称性

永山 ゆかり

アリュートル語の否定構造には肯定文との非対称性を示すものと対称性を示すものがある。

否定小詞 *allə* および *kətvul* をもちいる構造では、動詞語幹に否定接周辞 *a...-ka* が付加され、否定は二重に標示される。肯定文と否定文は非対称であり、肯定文においては動詞に人称やアスペクトを表わす接尾辞をつけるが、否定文においてはこれらの接尾辞は補助動詞に付加される。補助動詞としてもちいられる動詞は自他で異なる。このタイプはまた現実・非現実で非対称をなし、たとえば条件文では小詞 *allə* は使われず、接周辞 *a...-ka* のみで否定を表わす。否定小詞 *kətvul* をもちいる構造は禁止を表わす。このとき補助動詞は省略されることが多いが、希求法または命令法の接辞をともなつてあらわれることもある。

否定小詞 *qətəmmə* をもちいる構造は未来の否定を表わす。動詞は定動詞仮定法あるいは希求法であらわれ、肯定文とは否定小詞の有無でのみ異なる、つまり肯否で対称をなす。

[W-3-4]

イテリメン語の否定と法

小野 智香子

イテリメン語の否定の構造は (A)否定詞+動詞語幹-否定接尾辞(+補助動詞), (B)否定詞+動詞 の2種類に分類できる。否定詞は *qaʔm*, *zaq*, *wijaq*, *xeʔnc* の4種類があり, このうち (A1)過去・現在の否定 [*qaʔm*+動詞-(*ka*)q+定動詞直説法], (A2)否定命令 [*zaq*+動詞-(*ka*)q+定動詞希求法], (A3)反事実・禁止 [*wijaq*+動詞+定動詞假定法・希求法] では語彙的意味を担う動詞の *finiteness* が失われ, 法・人称・数・テンス・アスペクトといった文法範疇は補助動詞によって標示される。他方, 未来の否定を表す場合は [*xeʔnc*+定動詞希求法] という (B)の構造で現れ, 語彙的意味を担う動詞自体が定動詞になるという点で (A)の構造と大きく異なり, 直説法と希求法の対立がなくなる。以上のようにイテリメン語では法との密接な関連が否定の構造と形式に反映されている。